

総合学習（総合領域・かしわ選択ゼミ）

江藤	里佳	木戸	壽和子	濱田	弘一	前田	倍成
石川	誠	宮島	浩典	大峯	誠	山口	久代
八崎	和美	押野	正憲	松下	浩一	水野	郁代
釣本	直行	山岸	郁生	谷本	克典	今井	直人

1 これまでの歩み

本校が総合的な学習に取り組み始めたのは、平成7年度であり、翌8年度からは、「総合学習」と称して、実践と研究を重ねてきた。

当初は総合学習を「教科の枠を越え、今日的課題性のあるテーマを設定し、体験活動を通して、社会の変化に対応できる力や態度を育成すること」と捉え、「環境」「人間」「国際理解」（国際理解は後に文化）の三つの視点で実践を重ねてきた。その後、「英語活動」「情報教育」の二分野を加え、これらの活動も、この総合学習の時間枠に位置づけることにした。

しかしながら、前述の「環境」「人間」「国際理解」については、「テーマ設定型総合」であるがゆえ、教師主導の傾向になりがちで、必ずしも個の実態に応じていないのではという問題点も生まれてきた。

そこで一昨年より、従来の視点を大切にしながらも、総合学習でしかできない内容や方法、および総合学習で扱うべき素材や活動を考慮し学級単位で年間計画を立て、進めていくことにした。これまでの教師主導のテーマ設定型総合学習からの脱却を図るために、「共に生きる社会や環境に自ら働きかける姿」を願い、昨年度より学級単位での総合学習の他に、新たに「選択ゼミ」を設定し、英語活動、情報領域とともに四つの領域とした。

選択ゼミは、教師の持つ専門性や得意な事柄を生かしたテーマを、子ども自らが選び、知的好奇心や探求心を広げ、育む場をめざしたものである。

本年度は、英語活動を除いた時間を総合領域および選択ゼミの時間とし、実践を進めている（情報については教科や総合領域の中に含め取り扱う）。学級単位としての総合領域は主に中学年に、選択ゼミは高学年（教科、道徳、総合領域の発展）に位置づけている。

2 総合学習における

めざす子どもの姿について

私たちは前述した総合学習の歩みを大切にしながら、総合学習におけるめざす子どもの姿を次のように考えている。

共に生きる社会や環境に自らかわり
よりよい生き方を求めようとする姿

近年、環境、異・自文化理解、情報化社会、福祉・人権にかかわる今日的課題が生まれてきた。それらの諸課題を真摯に受け止め向き合い、自分のあり方や生き方を自己の内面に問いかける場が求められている。

それとともに、激しく変動していく社会や環境の中にあっても、子ども一人一人の「これはどうなっているのだろう」「こんなことをやってみてみたい」という学びに対する純粋な知的好奇心や探求心、真摯な問いかけや働きかけがより一層求められている。これがよりよい社会、環境、人間関係といった「共に生きる」という生き方を希求する姿が、今まさに求められているのである。

このような姿が、生涯学習における学びの姿であり、わたしたちが考える「共に生きる社会や環境に自らかわり、よりよい生き方を求めようとする姿」である。

総合領域では、中学年を中心に「人間」「環境」「文化」という今日的課題にかかわる視点で事象を捉え、その視点にかかわっての価値観の形成をめざす。そして、その価値観を形成していく過程の中で問題解決に必要な資質・能力や学び方を獲得していくことを大切にしていこう。

選択ゼミは、高学年における教科の発展的内容と中学年で総合領域における3つの視点を融合した形で学習内容を構成し、より個の学びに応じた形で学習を展開する。それは総合領域や各教科・道徳で培ってきた学びをさらに広げ深めることができるようにするためであり、子ども自らが選んだ学習の対象に対してさらに知的好奇心や探求心を広げ育んでいくことを大切にしていきたいと考えたからである。

以上のような総合学習の学びを通して、「共に生きる」という理念をもとに生涯にわたって自分を取り巻く「ひと・もの・こと」とかかわりながら学び続けようとする素地を築いていきたいと考えている。

3 学習活動の構成にあたって

(1) 総合領域

① 体験活動を通して

「ひと・もの・こと」への働きかけを促す

総合領域では、まず一人一人が主体的に問題を見つけ、さらに追求活動を行っていく原動力となる直接的な体験活動を重視したいと考えている。

その例として、野田山、犀川でのフィールドワーク、和菓子や加賀友禅を実際に作ってみる加賀野菜を栽培するなどの活動が想定できる。

このような活動の中では、見学をする、専門の人の話を聞く、実際にふれてみる、育てる、味わうなど、子どもが、五感をふんだんに発揮できるように留意したい。

これらの活動から「ひと・もの・こと」にかかわる問題意識や追求意識が喚起されることを願っている。

学習活動を構成するにあたっては、人的・物的環境の整備が必要となる。人的には、大学の研究者をはじめ、地域の専門家（和菓子や友禅の職人、環境NGOや福祉ボランティア等の市民団体関係者など）、物的には、前述のようなフィールドワークが可能な自然や史跡、施設などが考えられる。このような人材や素材、場を子どもの思いや追求の方向に応じて単元や活動に組み入れることができるような学習環境の整備は、子どもが自らの学びを獲得することを促す効果的な手段である。

また、異年齢、異校種間における交流を視野に入れた活動を計画している。このような学習環境は、子どもが新たな価値観に触れたり、価値観を見直したりする場として、有効なものとなると考える。

② 自己評価活動を通し

自分の変容の自覚を促す

総合領域では、主にポートフォリオ的な手法をもとに、自己評価活動を行っている。学習を通して生まれた、新たな気づきや疑問の蓄積は学習対象への意識やはたらきかけの変容を子ども自身が概観する上で大切な手がかりとなると考えるからである。

活動内容や状況によっては、評価ポイントごとにチェックリストや質問紙法による自己評価活動を行う。子どもが学習の楽しさ、自分のよさや可能性、満足感、達成感などを感得し、自分の変容を自覚するための一助となると考えたからである。

(2) かしわ選択ゼミ

① 自らの学びの獲得を促す

私たちは、選択ゼミを子どもが本来持つ知的好奇心や探求心ならびに科学する心（目）を拓く場として位置づけている。ここでは教科・道徳、総合領域での様々な体験を生かし、ゼミでしか触れることのできない世界に出会い、感じ、考えることを通して、自らの学びのさらなる獲得を促していく。

そのためには、子どもにとって魅力ある内容のゼミを開設する。ゼミ開設にあたっては、教科・道徳や総合領域で学んできたことの中から子どもにとって魅力ある学びの対象をより広く深く学ぶことができるよう配慮する。子どもは自らの知的好奇心や探求心をもとにゼミを選択し、自分らしい学びを広げ、深めていく。

また、ゼミは少人数編成とした。それは、少人数による密接なかかわり合いから、ともに学ぶ仲間や担当する教師のこだわるもの・こととの出会いからより多様な学び、より発展的な学びが経験できると考えたからである。例えば、必要に応じて校外へ出て対象となる事象に出会うこと、造詣の深い人から直接学ぶこと、本格的な機器を用いての活動など、本物に触れる機会をより多くし、より専門的な活動を行うことができるようにしていく。

そして、これまでに総合領域や教科・道徳で培ってきた学びをさらに広げ深めることができるよう、自らの学びの獲得を促していきたいと考えている。

② 自己評価活動で自分のよさの自覚を促す

毎回の活動ごとにふり返りカードで自分の学びをふり返っていく。どんな活動をしたか、どんなねらいで取り組んだか、何を学んだか、そのときの自分の思いを中心に記述する。そうすることで、自分の学びの特性やよさを自覚できるように促していく。

また、定期的に全体の場に広めていく。互いの活動記録を見合う交流が生まれ、自らの学びに自信を持つだけでなく他の活動にあるよさや友だちの学びの特性やよさに気づき、よりよい学びをつくっていかうとする原動力になると考えている。

さらに、交流会を行い、これまでの自分たちの歩みをふり返り、自分たちの学びや学び方のよさについて客観的な見直しが生まれると考えている。これら一連の自己評価活動から、自分のよさの自覚を促すことができると考えている。

4 総合領域編

実践例 - 6年 -

(1) 単元名 郷土の自慢 「加賀野菜」

- (2) 目標 ・加賀野菜について進んで調べたり、育てたりする活動を通して、加賀野菜とそれを育てている人々の思いにふれ、今なぜ加賀野菜なのかを考え、これからも加賀野菜を大切にしようとする気持ちを持つことができる。

(3) 指導にあたって

めざす子どもの姿と年間プラン

本学級の総合領域年間プランのテーマは「昔の生活の中には、今を生きるヒントがある」である。昔の暮らしには、今のような慌ただしい感じはなく、そこに流れている時間も含めてスローな感じがする。その中には、今の時代にはない豊かさがあつたのではないだろうか。そこで、今を生きる子どもたちにも昔の生活の良さを知ってもらい、これからの生活に生かして欲しいと考えてこのテーマを考えたい。そして、総合領域でめざす子どもの姿を「昔から現在に至るまでの生活を見直し、これから生きていく上で大切にしなければならないことを進んで考えていこうとする姿」と設定した。

まず、「ふじだなにに向けて」では、夏目漱石の「吾輩は猫である」を取り上げ、100年ほど前の生活について考えてみる機会をもつ。次に「郷土の自慢 加賀野菜」では、昔ながらの味や季節感、地域の特性を伝えていきたいという人々の思いにふれ、伝えていくことの意味を考える。さらに「昔体験！スローな生活」では、火起こしや物作りの体験を通して昔の技術のすばらしさや良さについて考える。そして「卒業に向けて」では、小学校生活の総まとめとして、感謝の気持ちを表現したり、これからの自分の生活について考える機会としたい。

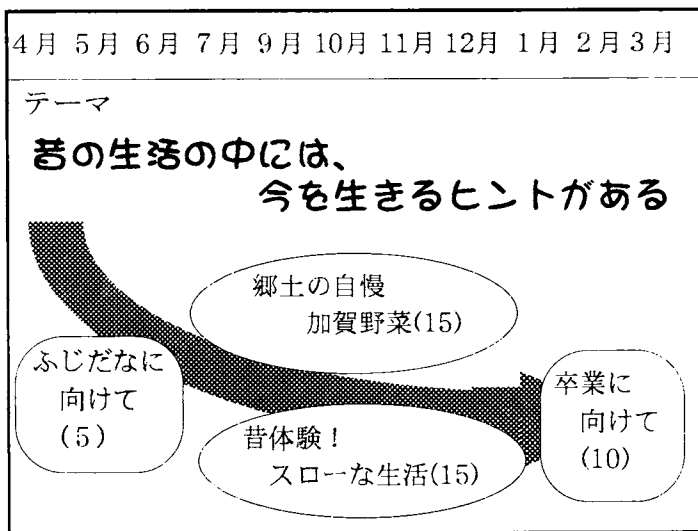
単元設定について

本単元では、金沢に昔からある「加賀野菜」について調べたり、実際に育てたりするとともに、栽培している人にもお話を伺いながら、加賀野菜について理解を深めていく。さらになぜ栽培されなくなってきたのか、また食べられなくなってきたのかについて考える。その上で栽培している人の「昔ながらの味や季節感、地域の特性を伝えていきたい」という強い思いを知ることから加賀野菜の価値について考えていくことをねらっている。そこには、これからどうしていきたいのかという自分なりの判断も表れてくるであろう。

5年生の農業の学習でも、野菜の生産については学習してきている。しかし、現在自分たちが食べている野菜についての学習であり、加賀野菜については取り立てて学習してはいない。また、野菜を生産している人の思いについては5年生でも学習している。その作物にかける情熱や農業に対する思いを受け、学習後の感想に「将来、農業をしてみたい」と書いた子もいた。

そこで本単元では、栽培の仕方だけでなく、金沢で昔から受けつがれている食べ方まで調べることで、金沢と加賀野菜の結びつきについて考えさせたい。そのことで、加賀野菜が単に昔から作られてきたということだけでなく、食文化ともつながりがあることがよりはっきりと見えてくると考える。そうすることで、加賀野菜の価値にまで迫れるのではないかと考えている。また、調

6年2組・総合領域年間プラン



べる際には聞き取りだけでなく、実際の見学を取り入れたり、図書館やインターネット等も活用したりしたい。また、表現する場面でもデジカメやコンピュータを利用するなどして、情報活用能力の育成も図りたいと考えている。

めざす子どもの姿にせまるために

①見学や栽培などの体験活動を通して学びの獲得を促す

野菜を取り上げるからには、実際に栽培してみたいと考えている。本や資料で調べただけではなかなかうまくいかないことで、実際に栽培している様子を見学にもつながっていくであろう。さらに、実際にそれを栽培している人が学校の近くにいるという事実から「見てみたい」「話を聞いてみたい」という意欲へも繋がっていきやすくなる。また、食べ方も実際に食すことで、野菜のおいしさだけでなく、昔からの料理法の良さにも気づいていけると考える。それらのことから、加賀野菜について総合的に考えていくことができると考えている。

② 専門家や学習園などの人的・物的環境を整備し連携を図る

学校近くの大桑には、実際にへた紫なすを栽培している農家の方がいらっしゃる。見学や聞き取りなどの調査活動が可能である。また、JA石川からも加賀野菜について話を聞いたりできると考えている。さらに栽培活動をできるように学習園を用意しておく。これらのことで、自分たちが学習したことと専門の方や実際の栽培活動との連携を図っていききたい。

③ 自己評価活動を通し自己の成長の自覚を促す

さまざまな活動をしていく中で、加賀野菜に対する思いは変化していくであろう。そこで単元の途中には、加賀野菜に対する考えを記述する場を随時設けていきたい。自分の思いの変化を知ること、これからどうしていけばよいかを考える場としたい。また、それを交流し合うことで自分の調べ方や考え方を振り返る場としたい。

単元計画 (総時数 15時間)

主 な 活 動 と 内 容		めざす子どもの姿に迫るために	評価ポイント
1	加賀野菜について知っていることについて話し合い 関心を持つ <加賀野菜ってどんな野菜なんだろう> ・名前は聞いたことがあるし いくつかは知っているよ ・どんな野菜があるのかな? いくつあるのかな? どこで作っているのかな? なぜ加賀野菜というのだろう? 栽培の仕方は? 料理の仕方は? ・自分たちも栽培してみたいな	(1)	加賀野菜について関心を持ち進んで調べようとすることができる
2	<加賀野菜について調べてみよう> ・インターネットから 本や資料から 八百屋さんから 市場から 家の人や栽培している人から <調べてきたことを発表し合おう> ・種類や取れる量が分かったよ 栽培の仕方も分かったよ どこで栽培しているのかも分かったよ ・昔は言わなかったのになぜ今「加賀野菜」と呼ぶようになったのだろう <加賀野菜と呼ぶのには何か意味があるのだろうか> 加賀野菜に込められた願いや思いを探ってみよう	(1)(3)	自分たちで調べたり 考えたりしたことから 加賀野菜についてこだわりのある思いをもつことができる
3	・JA石川の人に聞いてみよう <加賀野菜を自分たちも栽培してみよう> ・苗から植えるんだ 水やりもしっかりとしよう 他にも気をつけることはないかな ・収穫できたら、調べた料理法で食べてみよう ・とてもおいしかったよ	(1)(2)(3)	加賀野菜の栽培や調理に進んで取り組み加賀野菜についての思いを深めることができる
4	<加賀野菜はこれからどうなったらよいか?> ・自分たちが大人になったときにも食べたいな ・ずっと残していきたいな ・野菜だけでなく 料理の仕方や食べる季節も大切だよ <加賀野菜について考えたことをまとめよう>	(1)(4)	加賀野菜の良さに気づき これからのあり方について自分なりの考えをもつことができる

(4) 本単元における授業の実際と考察

本学級における総合領域でめざす子どもの姿は「昔から現在に至るまでの生活を見直し、これから生きていく上で大切にしなければならないことを進んで考えていこうとする姿」である。この姿に迫るために単元計画にある評価ポイントを中心にしながら、その手だての有効性について考察していく。

① 加賀野菜について関心を持つ

加賀野菜について関心を持ち進んで調べようとするができる

昨年度の総合では、稲と大根を育てた。そこでは一生懸命に作物を育てたり、収穫を味わったり、収穫後の不要なものを利用して制作活動をしたりして十分に楽しむことができた。その経験もあってか、今年度の総合の内容を考えると真っ先に出てきたのが何かを栽培したいという意見であった。ただ栽培するのではなく、何か意味のあることをしたいという思いから金沢で有名な加賀野菜を育ててみようということになった。

加賀野菜について知っていること（事前調査）

○知っている子 2名

- ・生産量が減って保存につとめている。
- ・加賀野菜を作っている人がだんだん少なくなってきていることです。加賀野菜の種類も少し知っています。

○食べたことのある子 9名

- ・あんかけにすると美味。
- ・太きゅうりはたまにみそしるに入っていて食べたことがあるけどきゅうりとはにてもにつかない味だった。
- ・（太きゅうりは）皮がかたくてむかなきゃいけない。皮はけっこうつるつる。
- ・（金時草は）葉っぱの表の色が緑で、うらがむらさき。ゆでるとぬめっとする。すをつけて食べる。
- ・金時草はゆでると（水が）むらさきになり ゆでてしぼったらねばねば。くきがおれたらまた土にうめとけばねっこがはえる。
- ・（金時草は）色はむらさき+緑の葉。食べるとねばり気がある。おひたしやすのものにするとするとおいしい。
- ・（赤皮甘栗かぼちゃは）くりのようにほくほくしている。オレンジ色の皮をしている。
- ・ゆでるとはっぱのひょうめんのむらさき色がおちる。とけるようにやわらかくなる。酢の物で食べることが多い。
- ・食べるとねばりけがある。ゆでたらゆで汁がむらさき色になる。

○ほとんど知らない子 24名

- ・（知っていることが）まったく無いからこれからいろいろ知りたい。
- ・食べれること以外なし。 など

加賀野菜については、5年生の時の社会科の学習で出てきており「加賀野菜」という名前については知っている子が多かった。しかし、加賀野菜にはどんなものがあるかについてはそれぞれが名前を一つか二つぐらいしか知っていなかった。そこで、加賀野菜について関心を高め、調べる意欲を高めようと栽培活動を同時に進めることにした。



うつき
打木赤皮甘栗かぼちゃ

野菜の栽培には、それぞれ適した時期がある。この単元を始めたころがちょうどその時期に当たっており、そのことから栽培活動を同時進行的に進めることにした。自分の育ててみたい加賀野菜の苗を植えたただけであったが、植えて育てることで興味・関心が一段と高まったことが、次の感想からはっきりと見ることができた。体験活動を取り入れることが意欲を高めるうえでたいへん重要であったことがわかった。

加賀野菜の苗を植えた後の感想

- ・植えながら加賀野菜ってふつうの野菜とどこがちがうのかなあと思いました。
- ・見たかんじふつうのきゅうりみたいなかんじだった。何がちがうのだろう。
- ・農家の人は一つでも大変なえ植えを何個も植えていると思うとすごいなあと思いました。
- ・穴をほって苗を植えるといわれて、いつものように苗を植えるぐらいの深さで穴をほったら浅すぎて入らなかったんで金時草って根が長いのかなと思いました。
- ・最初はやっぱり縦にふた葉とかがはえるんだな。

② 加賀野菜について調べる

自分たちで調べたり 考えたりしたことから 加賀野菜についての思いをもつことができる

加賀野菜については、名前以外はほとんど知っていることがなかった。そこで、教科の学習でもやっているように、まず知りたいことを挙げていった。そして、調べてみたい野菜を選び、それらの項目についてグループに分かれて調べ活動にはいった。

調べる野菜 加賀太きゅうり、金時草、打木赤皮甘栗かぼちゃ、加賀つる豆、へた紫なすの5種類

調べる項目 歴史、名前の由来、生産地、栽培方法、味、食べ方、売れ行き、栄養素、年間生産量
1本の苗からいくつ獲れるか、味の11項目

調べ活動では、インターネットや図書室の本などで調べる子が多かった。しかし、中には近所のスーパーで聞いてきた子もいた。さらには、わざわざ市場まで出かけていき、市場の人に直接聞いてきた子もいた。そして、加賀野菜について書いてある本もいただいてきていた。

グループごとに調べたことは、みんなの前で発表し、交流することになった。野菜の種類ごと

発表後の感想、意見（1）

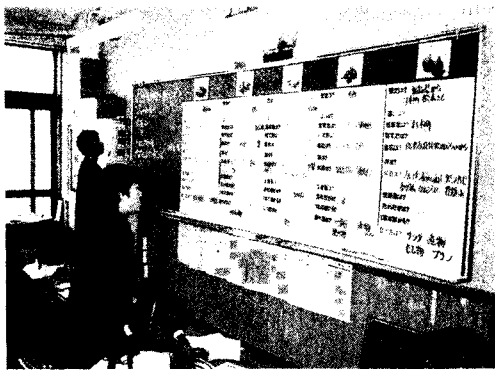
- A児：加賀野菜というけれど、加賀以外でもたくさん売れてて栄養もいいんだと思った。
- B児：眺めてみて栄養素が多いのにびっくりした。
- C児：加賀野菜は栄養がいいと思う。太きゅうりとかぼちゃが同じ所で作られていてびっくりした。
- D児：昔から金沢だと思っていたけれど、ロシアとかから来ていてびっくりしました。
- E児：低温に弱いのに何で金沢なんだろうか。
- F児：初めに始まったところが金沢以外なのになんで加賀野菜というのかなと思った。
- G児：かぼちゃが3tしかなくて、少なくてびっくりしました。
- H児：一つの苗から300個もとれるのに、なんで40tしか生産されていないのかが不思議。
- I児：金時草やきゅうりが思ったよりも生産量が多いと思った。
- J児：かぼちゃが加賀野菜なのに独特な食べ方がないと思う。
- K児：金時草はおいしくなさそうだけど、何で売れているの。
- L児：だら豆とかおもしろい名前があってびっくりしました。
- M児：金時草は熊本では水前寺菜とか不思議な名前がつけられている。
- N児：加賀野菜は新しいと思っていたけど、歴史があった。



協力して調べたことを発表する様子



発表を聞いての質問をする様子



調べたことをまとめた黒板

発表後の感想、意見（2）

- T : 加賀野菜というけれど、金沢だけでつくっているのではないね。外国から来た物もあるのに何で加賀野菜って呼んでいるのだろう。
- O児：一番最初に伝わったから。...
- P児：加賀でつくったから。
- T : だから加賀野菜なの。
- P児：加賀でつくっている野菜は加賀野菜。
- Q児：加賀でつくっているトマト、きゅうりも加賀野菜になっちゃう。
- T : 加賀キャベツとかもあるの。
- P児：その中の特徴的なものだって。

に順番に発表していった。発表の後、感想や疑問に思ったことが出てきた。

調べ活動に入る前の思いと比べて明らかにそれぞれがこだわりをもっているような思いが見られた。A児～C児は、学習に入る前には加賀野菜についてはほとんど知らなかったのに、栄養のことについてこだわりをもっている。C児～F児は産地について、G児～I児は生産量、J児は食べ方、その他名前や売り上げなどにしっかりとこだわりをもっている様子が伺える。

また、P児は、最初は加賀野菜についてはほとんど興味がなかった。しかし、苗を植えることで農家の人の苦勞に気がつき、さらに紫へたなすの栄養分を調べて発表していた。そこから加賀野菜という名前や産地にこだわりがたいへん強くなっていったと思われる。

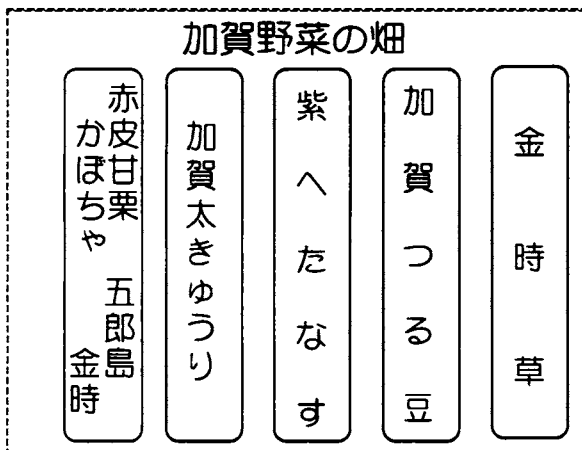
このように、調べたことをお互いに交流することで自分の調べた野菜と他の子が調べた野菜を比べて考えることができたからであろう。また、発表したことを板書する際に調べた項目毎にわかりやすく板書したことでお互いの結果を比べやすくなったからであろう。

この後、分からないことを確かめるために、農協の人や加賀野菜を認定している金沢市農産物ブランド協会の人に詳しいことを聞くことになった。

③ 加賀野菜を栽培してみよう

加賀野菜の栽培や調理に進んで取り組み 加賀野菜についての思いを深めることができる

前に述べたように野菜の栽培は時期的なものがあり、学習を始めるに際してすでに苗を植えた。栽培している農家が少なく、また、加賀野菜ということで今注目を集めているので手に入れた苗は、赤皮甘栗かぼちゃ、加賀太きゅうり、紫へたなす、加賀つる豆、金時草の5種類である。



畑で育つ加賀つる豆の様子

加賀野菜を育てている途中の感想

- ・これから水を1日でも忘れてたらかれてしまうのでしっかり水やりをしようと思った。
- ・私はかぼちゃを植えて、お店に売っているような加賀野菜になるかどうか少し心配です。
- ・もしかして、ふつうの野菜よりつくるのが大変なのかなと思いました。だから、もっと深く加賀野菜について知りたいなあと思いました。



収穫できた加賀野菜

る。その後、五郎島金時（さつまいも）も植えた。

本校には、学年に割り当てられた学習園がある。しかしそこは理科の学習でジャガイモが植えてあり、利用できない。そこで休ませてある学習園を使い、植えることにした。

前出の調べるグループごとに、3本から5本の苗を植え、世話を始めた。グ

ループ毎にしたのは、できるだけ苗1本あたりの人数を少なくしたいと考えたからである。そうすることで自分の苗だという思いをたくさんの子にもって欲しかったからである。そのせいか毎日の水やり、草むしりなど協力して、取り組むことができていた。

育てている途中の感想にも見られるように、育てることを通してでしか出てこないような様々な思いが子どもの中に生まれてきた。また「もっと加賀野菜について知りたい」のように育ていく中で思いが深まり、追求意欲が高まっていった子もいた。

④ 今までの実践を終えて

まず「昔から現在に至るまでの生活を見直し」ということについて考えると、加賀野菜の学習が自分たちの生活を見直す機会となったように思う。野菜嫌いな子どもたちが多く、家庭科でも野菜については学習しており、栄養素なども知っているはずである。しかし、加賀野菜が昔から食べられてきたというだけの理由ではなく、歴史的にも、栄養的にもしっかりと意味があることを知ったことで今まで以上に野菜という存在を見直したように思われる。それは、食べてみての感想の中に表れている。学習する前には、ただの野菜としてしかみていなかった加賀野菜をわたしたちの加賀を代表するとても大切なものとして考えるようになってきている。この後、実際に栽培している人たちの話を聞くことで、その思いがより強くなっていければと考えている。

思いがあまり強く出ない子でも、嫌いだといっていた野菜でもおいしいと食べる姿や、嫌いだといっていた野菜を喜んで持ち帰っている姿に表れているであろう。子どもにとって、そんなことから加賀野菜を調べたことが自分たちの生活を見直すよい機会となったと言えるだろう。

次に「これから生きていく上で大切にしなければならないことを進んで考えていこうとする姿」については、まだ実践が全て終わったわけではないので、あまり言うことはできない。しか

加賀野菜を食べてみての感想

- (R児) とてもおいしかった。味はふつうのきゅうりと同じだった。はじめは、ふつうの野菜ではなくて、加賀でつくっている特別な野菜ぐらいにしか考えていなかった。でも、形や食べ方など他の野菜と同じだった。私たちの住んでいる金沢で作られていて、加賀の代表みたいなものだから選んで買うようにしたい。今も作り続けている人たちには、ありがとうっていいたい。

し、今までの学習を通して「自分の家でも作って食べていきたい」「加賀野菜がもっと増えていってほしい」という思いが生まれてきている。このことから加賀野菜を大切にしていきたいという思いが子どもに芽生えてきているといえるであろう。子どもは加賀野菜について、このように自分なりの思いを持つことができた。また、次に育てる大根のことをすでに心配し始めている。このことから加賀野菜の将来の姿をこのあと考えていけるのではないかと期待している。

※ 加賀野菜については以下のホームページを参考にした。

- ・金沢市農産物ブランド協会

<http://www.kanazawa-kagakasai.com/>

- ・丸果石川中央青果加賀野菜

http://www.maruka-ishikawa.co.jp/kagayasai/kagayasai_top.htm